

まちなか公共空間が大学生の討議に与える影響の分析

京都市 非会員 ○西本 健太 山口大学 正会員 榊原 弘之
 山口大学 非会員 小林 剛士 山口大学 非会員 宋 俊煥
 山口大学 非会員 山口大学 非会員 鳩 心治

1. はじめに

地方都市において、少子高齢化や人口減少が深刻な課題となっており、多くの地方自治体が地域活性化を推進している。近年、その取組の中で「交流する場」の重要性が指摘されており、周囲との相互作用がある開放的な公共空間が、地域活性化への手助けになると期待されている。一方で、地域活性化に対する大学の貢献への期待も高まりつつあり、大学の教職員のみならず、大学生も地域に積極的に関与することが期待されていると考えられる。例えば宇部市では、「公・民・学」が連携してまちづくりを進めるために、若者クリエイティブコンテナ（YCCU）という公共空間が2017年4月に設置された。本研究では、このような「まちなか公共空間」という場がもたらす効果を明らかにし、まちなか公共空間の存在意義を示すことを目的とする。

2. 本研究の着眼点

既往研究ではアンケート調査により、大学生のまちづくり参加意識に影響を及ぼす要因について、定量的な評価が試みられている¹⁾。しかし、公共空間の存在や公共空間に対する認知状況が、大学生の意識にもたらす影響については十分に実証されなかった。また、座席配置や着座状況（立位、座位）が、共同作業に与える影響についての既往研究^{2),3)}も存在するが、より大きな範囲での環境の違いの影響については十分に検証されていない。さらに、意見への関与程度ややり取りといった、質的影響の分析も行われていない。そこで、公共空間の効果や意義を示すためには、アンケート調査では限界があると考え、本研究では4人1組の討議実験を実施した上で、量的・質的影響の分析を行うこととした。

3. 分析手法

山口大学工学部の大学生を被験者として、4人1組の討議実験を実施した。討議実験の実施場所としては、開放的なまちなか公共空間（YCCU）と、相対的に開放度の低い空間である大学内の教室を使用し

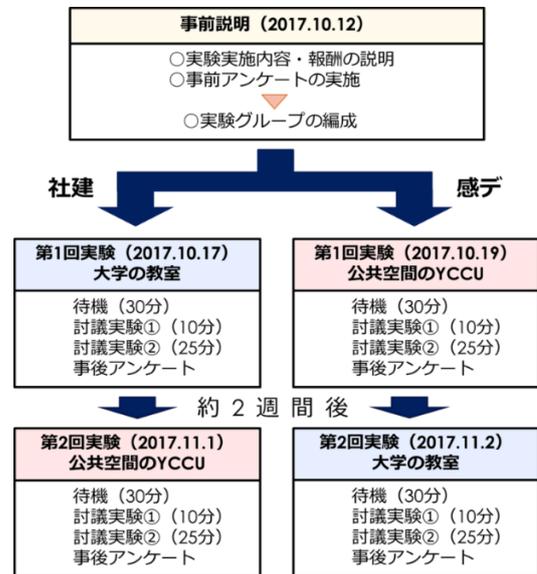


図1 討議実験全体のフロー図

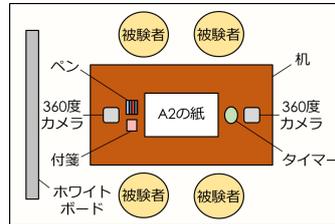


図2 道具の配置



図3 討議の様子

た。討議の様子は、360度カメラによって録画された。被験者は計32名で、社会建設工学科16名（学部4年生）と感性デザイン工学科16名（学部4年生及び大学院修士1年生）とした。（以下の記述では、「社建」、「感デ」と表記する。）討議実験全体のフロー図を図1に示し、討議課題については以下に示す。

【第1回実験】 討議課題

- 討議課題① 部首が「さんずい」の漢字
- 討議課題② 字部の良いところ、悪いところ

【第2回実験】 討議課題

- 討議課題① 部首が「きへん」の漢字
- 討議課題② 字部をもっと学生の住みやすいまちなかにするために何が必要か

事前アンケートの結果により、被験者を「積極性

に関して自己評価の高い被験者」と、「低い被験者」に二分した上で、討議グループを編成した。アンケート内容は、①日頃の活動状況に関する質問（サークル加入状況，地域での人的交流密度等），②地域への関心に関する質問（愛着等），③自分自身の性格に関する質問（社交性等）とした。図2に討議実験の道具の配置，図3に討議の様子を示す。

討議実験で録画された動画に基づき，量的影響の分析を実施した。具体的には，被験者の発言数を議論の活発度の基準値とし，その大小を比較した。

4. 分析結果

(1) 発言数の平均値比較

発言数の平均値比較について図4と図5に示す。いずれの課題においても，両学科とも大学より公共空間の方が，平均発言数が多いことが分かる。

(2) 対応のあるサンプルのt検定

以下の分析では，討議課題②の結果のみを使用する。対応サンプルの統計量について表1に示す。対応のあるサンプルのt検定の結果として，t値が-4.155，P値が0.000となった。従って，同一被験者について，大学よりも公共空間の方が，発言数が有意に多いことが示された。

(3) 分散分析

目的変数を発言数として分散分析を行った。有意水準は両側5%とした。結果を図6と図7に示す。まず，説明変数を環境の違いと人的交流密度として分析を行った（図6）。環境の違いの影響は1%有意で示されたが，人的交流密度の影響は有意に示されなかった。次に，説明変数を環境の違いと社交性として分析を行った（図7）。環境の違いの影響も社交性の影響も，共に5%有意で示された。これより，大学より公共空間の方が，発言数が多く，同時に社交性が高い被験者ほど，発言数が多くなるという結果となった。

5. おわりに

以上より，まちなか公共空間が議論を活性化する効果は示され，存在意義があると考えられる。今後の課題として，まちなか公共空間を利活用するきっかけづくりの検討が挙げられる。

謝辞：本研究は科研費基盤研究（A）（16H02384）の助成を受けたものである。付して謝意を表します。

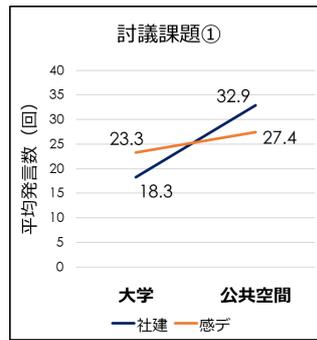


図4 発言数（課題①）

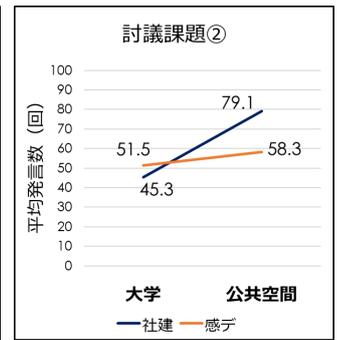


図5 発言数（課題②）

表1 発言数に関する記述統計

	平均値(回)	度数(人)	標準偏差(回)
大学の発言数(回)	48.38	32	23.859
公共空間の発言数(回)	68.69	32	40.197

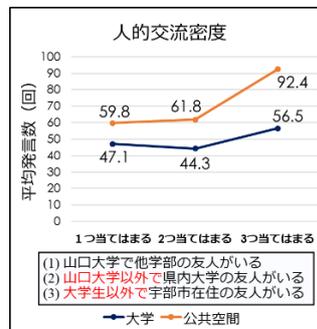


図6 人的交流密度

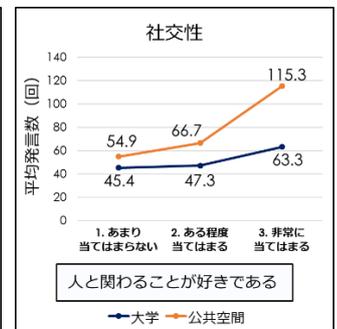


図7 社交性

	F 値	P 値
環境の違い	7.130	0.010
人的交流密度	2.568	0.085

	F 値	P 値
環境の違い	6.161	0.016
社交性	3.331	0.043

参考文献

- 1) 高木将志：地方大学学生のまちづくり参加意識の形成要因に関する研究，山口大学工学部卒業論文，2017。
- 2) 前田薫子・金元圭・呉冰王炎・松田雄二・鯨井康志・西出和彦：室空間環境とレイアウトが創造活動と心理評価に及ぼす影響に関する考察－オフィスにおける知的創造空間に関する実験的研究－，日本建築学会計画系論文集，Vol.75，No.652，pp.1389-1398，2010。
- 3) 李奎皇・三森弘・宇陀則彦：グループ知的活動の生産性と満足度の評価－立位と座位の比較－，図書館情報メディア研究，Vol.13，No.2，pp.15-22，2016。